

ヤドリギ (宿り木 ・ 宿木 ・ 寄生木、ホヤ、トビズタ)

牧 幸 男

2月、立春が過ぎ気温の上昇が始まる。しかし、葉を落とした木々は未だ黒灰色の枝を空に伸ばしたままで、芽は硬い皮の中で静に春を待っている。この頃、大木の枝先にヤドリギの若緑色の塊がよく目に付くようになる。面白いことに、ヤドリギが寄生する木は限られ、一箇所に固まっているのが特徴のようだ。身近な所で観察できないため、どちらかと言えば目立たない地味な植物であろう。しかし、ヨーロッパでは古くから、親しまれている植物だけに、旅の途中ヤドリギは良く目にすることができる。観察するとヤドリギが生育している樹とそうでない樹があるのは、果実が熟する頃に鳥が集まりやすい樹とそうでない樹があるからだろう。



ヤドリギの冬の姿 (左) と夏の姿 (右) : 松本アルプス公園にて

木々が葉を落とした時期のみ、私たちは関心を示すが、多くの人は存在することすら知らずにいる。子供の頃、このヤドリギの塊を烏や、鷹など大型の鳥の巣かと思っていた。父に尋ねると「ヤドリギと言う植物で、この植物が生えるとその木は枯れてしまう。」と語ってくれた。成人してヤドリギに関心を示すようになると、宿主を枯らすことがないことを知った。この植物は地面には根を張らず、他の樹木の枝の上に生育する常緑の半寄生の多年生植物である。植物自体で光合成を行って成長し、ミネラルの供給を宿主に依存している程度である。

ヤドリギの生育は変わっている。冬季になるとこの果実を好む鳥がよく集まる。キレンジャク、ヒレンジャク、ツグミ等はこの果実を好むことで知られている。排泄された種子の内部は粘りがあり、鳥の腸を容易く通り抜け、長く粘液質の糸を引いて樹上に落ちる。その状態でぶら下がっている姿を見ることが多い。粘液によって樹皮上に張り付くと、そこで発芽する。枝に付着した未消化の種子が発芽してから最初の葉が開くまで、3年半かかると言われている。ヤドリギの繁殖は、江戸時代に小鳥の糞によって繁殖するまで知られていたが、鳥の種類までは分かっていなかった。

ヤドリギの特異的性質は冬季宿主の樹が氷を吸い上げなくなるので、葉に蓄えた水分で生き抜く力がある。宿主になるのは主に落葉広葉樹で榎、^{エノキ} 櫻、^{ムクノキ} 棕木等のニレ科の植物、柏、栗、小檜等のブナ科、又クワ科やバラ科の植物である。



ヤドリギの果実

我々が目にしてしているヤドリギは、広義にヤドリギ類の総称的通称だが、わが国に生育する種は、セイヨウヤドリギ *Viscum iscum album* の亜種である。日本に自生するヤドリギの学名は *V. album* subsp. *coloratum* (牧野富太郎は *V. album* L. var. *letescens* としている。) で、ヤドリギが標準和名となっている。種類の多いヤドリギであるが、大別すると、大葉ヤドリギ、穂状ヤドリギ、檜葉ヤドリギ、西洋ヤドリギ等が知られている。生育状態は、高い木の枝の上に着常するヤドリギ科 (APG 植物分類体系ではビャクダン科) の緑小低木で、成長すると葉は又状に分枝し、それぞれの上端に濃緑の細長い皮質の双葉を付ける。日本のヤドリギは、全体の

大きさは60 cm～1 m程度で、早春、黄緑色の目立たない小さな花をつけ、花後球形黄色の実を結ぶ宿り木や、赤い実を成らす赤実宿木、松に寄生する松組がある。

この植物が沐々の高い所に寄生し、その独特の姿から、古くからヨーロッパでは宗教的に神聖な木とされ幸運を呼ぶ木であり、昔は神が降りる場所と信じられていた。特に、鳥の巣の様な形で、大きく丸々としたヤドリギは、冬の神秘を感じていたのだろう。そのためヨーロッパでは神秘の植物として多くの伝承が残っており、詩歌の対象となってきた。伝承の一つ、ケルト伝承では、ヤドリギは「不死・活力・肉体の再生」を表すシンボルだったとされ、ヤドリギが寄生している木には、神が宿っていると信じていた。その他、西洋ヤドリギが、大木を奴隷のようにして養分を吸収する姿と思われ、「弱」よく「強」を制する姿で、その力は天の神々も恐れていると信じられていた説もある。

ヨーロッパではクリスマスにヤドリギの実の付いた枝を飾る習慣があり、ポピュラーな植物である。大地に根を持たずに木で繁殖し、冬になっても枯れず、枯れたような枝間に緑色に輝くヤドリギは、欧米では「再生のシンボル」「永遠の命のシンボル」として神聖な不思議な力を持つものとして尊重されてきた。そして、神が宿る樹とされ、ヤドリギを子孫繁栄の目的で良く飾るだけでなく、ブローチを胸につけたりする。その他、「ヤドリギは愛の象徴として、クリスマスにこの木の下に立っている女の子にはキスをしていい。‘kissing under the mistletoe’」と言う言い伝えがある。



ヤドリギのブローチ

わが国では、木に寄生するのではなく、宿る木と考え、保与と呼ぶことがあった。不思議さを秘めた植物だけに、古くから短歌の対象になっていたが、一年中同じような形態を示し、季節感がはっきりしないためか、俳句にはあまり登場していない。

あしひきの ^{こぬれ} 山の木末の ^{かざし} 保与取りて ^ほ 挿頭つらくは 千年寿くとぞ 大伴家持

月光の 愛でし宿り木 我に雪 柊美来

「日本名は、寄生木。宿り木の意味で他の樹に寄生して生活するからである。別名ホヤの意味は不明、トビズタはこの木をツタに例え、樹のから樹に移って生えるからである。檜寄生かしと言う中国名は実際にはない。漢名は冬青である。」と牧野富太郎博士は述べている。別名に柏宿木、寄生木、松蘿、保与、ホヤ、ホイ等がある。それぞれの由来は柏宿木、寄生木は寄生して成長するから、松蘿はツタの姿に例えたもの、トビズタは樹から樹に移って成長すると思われていたから、保与は古名、「ほや」と「ほい」は寄生の意味で植物の姿からである。学名は *Viscum album* で、属名は「とりもち」に由来する古語で果実の粘性によるもの、種小名はラテン語の白の意味で、果実の色と粘性から名付けられた。

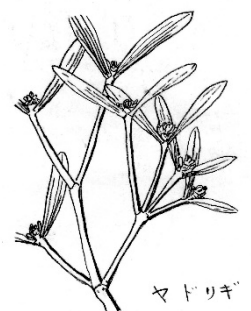
薬用としての歴史は古く、ヒポクラテス (BC460～BC370) が憂鬱病に用い、パラケルスス (1493～1541) は癩癩に使用していたとされている。わが国では、春に成長した茎葉を乾燥させたものが生薬名「桑寄生そうきせい」と呼んでいる。『神農本草経』(250～250 頁編纂) の上品に「桑上寄生」の原名で収載され、「寄屑きせつ」、「寓木くうぼく」、「宛童えんどう」などの別名があげられている。李時珍(1518～1593)は「この物は他の木に奇遇して生じ、鳥が上に立ったようだ。故に寄生、蔦木と言うのである。」と述べ、漢方では鎮痛、強壯、神経痛等の運動機能の痛みに伴う疾患、婦人の胎動、胎漏、産後の乳不足などに応用する。また、民間では利尿、解毒、鎮痛、強壯作用に利用してきた。

最近の研究が進み、滲出液に血圧降下、コレステロール降下、狭心症、関節リウマチ等の治療に応用されている。又、果実酒は「疲労回復、滋養強壯、健胃、産後の回復、腰痛、精神安定」に利用されている。

食用に利用する場合、薬膳では桑寄生を煮物に用いる他、お茶(桑寄生)としても用いる。

花言葉は「私は困難に耐える。」、「堅忍不拔」である。

面白いことに、ヤドリギは樹皮では発芽するが、土では発芽しない特徴がある。寄生し木としてケヤキやエノキがあるようだが、発芽は容易でないようだ。



ヤドリギ